

東日本大震災がオペラ界に与えた影響Ⅱ

～震災2年目の動向について～

小村 公次

1. 被災3県におけるオペラ活動の状況

東日本大震災がオペラ活動に与えた影響について、本年鑑2011年版では2011年3月11日を起点として、日本のオペラ界で起きた事態を時系列にそって記録し、その影響についてさまざまな角度から検証した。

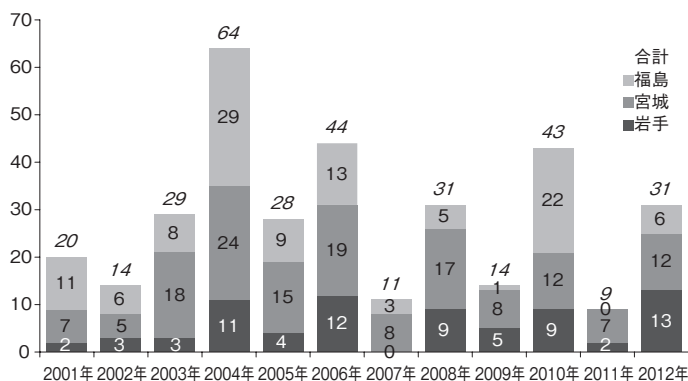
それを要約すると、地震によるホール等の損壊で公演の中止や延期となったことに加え、原発事故によって大きな困難に直面した。その影響はまず「計画停電による交通・電力事情の悪化」による公演中止や延期となってあらわれたが、やがて「行事自粛」となり、さらには海外から来演する予定だった歌手や演奏家たちの「原発事故による自身の健康への懸念」から来日中止という事態となった。

こうした状況を反映して、日本でのオペラ公演の総上演回数は、2010年の1170回から2011年は903回と267回も減少した。これは2011年に予定されていた公演が1000回近くあったことからすると、地震と原発事故による影響が甚大であったことがわかる。こ

うした状況をふまえたうえで、震災2年目を迎えた2012年のオペラ界について、本稿では特に被災地である岩手・宮城・福島3県における動向について詳しく検証してみたい。

この3県に活動拠点を置くオペラ団体は、仙台オペラ協会や福島オペラ協会などで、首都圏や東海、関西等と比較すると必ずしも多くない。また、2010年の総上演回数に占める比率でみると、3県の総計は43回で3.68%である。これは関東58.12%、関西12.05%、中部・甲信越11.20%、九州・沖縄6.84%、中国・四国5.98%、北海道・東北5.81%というように、オペラ上演が東京など大都市圏に集中している状況もあって、もともと少なかった。しかし、地元のオペラ団体や内外のオペラ団体による巡回公演等によって、比較的活発にオペラ上演が行われているとみることもできる。そこで、この3県におけるオペラ上演回数について調べてみると、2001年から2012年までの推移はグラフ1のような状況であった。(データは本年鑑記載の都道府県別上演回数による)

グラフ1 被災3県でのオペラ上演回数の推移2001～2012年



(注: グラフ上部の斜体数字は上演回数の合計値)

これは国内団体と海外団体が3県で公演した回数の総計だが、グラフを見てわかるように隔年ごとに増減を繰り返す傾向がうかがえる。こうした傾向は日本におけるオペラ上演の特徴であり、この3県における状況もそれを反映しており、2011年はもともとオペラ公演の少ない年にあたっていたとみることができる。

だがその内訳を詳しくみると、必ずしも

そうではないことがわかる。それは、2001年以降の3県でのオペラ上演回数が多かった2004年と震災前年の2010年、そして2011年と2012年の上演状況を比較してみると、非常に特徴的な状況が見えてくるからである。やや細かくなるが、比較対象とした2004年、2010年、2011年、2012年に3県でオペラを上演した団体と演目を具体的にみることにしたい。

表1: 2004年 (14団体、64回)

上演団体	所屬地	演目	回数
スボレート実験歌劇場	海外	舞台裏騒動	1
スロヴァキア国立歌劇場	海外	椿姫	2
ポーランド国立ワルシャワ室内歌劇場	海外	魔笛	1
ローマ・イタリア歌劇団	海外	椿姫	1
バーデン市立劇場	海外	コシ・ファン・トゥッテ	2
市民のための喜歌劇「こうもり」実行委員会	岩手	こうもり	1
仙台オペラ協会	宮城	アポロとヒヤキントス 3 フィガロの結婚 2	7
白石市民オペラ		ラ・ボエーム 2	
オペラ座山形・ムジカリリカ	山形	椿姫	2
二期会合唱団	東京	小さなエントツそうじ屋さん 5	11
二期会		小さなエントツそうじ屋さん 3	
錦織健プロデュース・オペラ		セビリヤの理髪師 1	
アーツ・カンパニー		カルメン 2	
オペラシアターこんにゃく座	東京	あおくとときいろちゃん 1 まげもん 4 森は生きている 28 どんぐりと山猫 3	36

表2: 2010年 (7団体、43回)

上演団体	所屬地	演目	回数
ウィーン・シェーンブルン宮殿劇場	海外	こうもり	3
ウィーンの森バーデン市劇場	海外	ラ・ボエーム	1
ウクライナ国立歌劇場	海外	アイーダ	2
ベルガモ・ドニゼッティ劇場	海外	愛の妙薬	1
仙台オペラ協会	宮城	鳴砂 2 ヘンゼルとグレーテル 2	4
オペレッタ劇団ともしび	東京	金剛山のトラたいじ	5
オペラシアターこんにゃく座	神奈川	セロ弾きのゴーシュ 19 ネズミの涙 2 まげもん 5 森は生きている 1	27

表3：2011年（2団体、9回）

上演団体	所属地	演目	回数
仙台オペラ協会	宮城	あまんじゃくとうりこひめ	3
オペラシアターこんにゃく座	神奈川	ネズミの涙 2 よだかの星 4	6

表4：2012年（9団体、31回）

上演団体	所属地	演目	回数
ソフィア国立歌劇場	海外	ジャンニ・スキッキ 1 カヴァレリア・ルスティカーナ 1	2
奥州市文化振興財団	岩手	椿姫 1	3
岩手県文化振興財団		魔法の笛 2	
仙台オペラ協会	宮城	愛の妙薬 2 ドン・ジョヴァンニ 2	4
地域振興芸術委員会	福島	白虎 2	3
福島オペラ協会		蝶々夫人 1	
オペレッタ劇団ともしび	東京	金剛山のトラたいじ	3
千葉大学合唱団	千葉	アシタノキョウカ	1
オペラシアターこんにゃく座	神奈川	ネズミの涙 2 よだかの星 6 ピノッキオ 3 ねこのくにのおきやくさま 2 森は生きている 2	15

(注：演目末尾の斜体数字は上演回数)

これをみると、震災のあった2011年に3県でオペラを上演したのは、地元の仙台オペラ協会と神奈川県に本拠を置くオペラシアターこんにゃく座の2団体だけで、それまではほぼ毎年巡回公演を行っていた海外団体や他の国内団体公演はゼロだった。実際、仙台オペラ協会が地元の仙台市青年文化センター交流ホールで《あまんじゃくとうりこひめ》を上演したのは震災前の1月29、30日であり、その後、本拠地での公演は物理的に行うことができなかった。本年鑑2011年版で詳しくふれたように、同協会が震災後にオペラを上演したのは、新国立劇場の地域招聘公演で7月に《鳴砂》を東京で上演したときだけである。

またオペラシアターこんにゃく座が上演したのは、震災後の6月14、15日に岩手県北上市で行った高校芸術鑑賞会での《ネズミの涙》と、6月1、3、28日に仙台市内の小学

校体育館で行った学校公演での《よだかの星》の2演目だった。いずれも震災による影響を免れたホールや体育館で上演可能となった結果だが、地震による損壊や体育館が避難所となったため中止や延期となった公演も多数あった。

2. 被災2年目の状況

では、被災2年目の2012年にこの3県で行われたオペラ公演はどのような状況だったろうか。表4をみると、震災2年目の2012年に3県でオペラを上演したのは9団体で、その内訳は海外団体1、国内団体8だったが、注目したいのはこの3県に本拠を置く5団体が公演を行っていることである。

まず岩手県では、県文化振興財団がモーツァルトの《魔法の笛》を盛岡市の岩手県民会館で2回上演したが、これはもともと前年に予定されていたものが震災の影響で延期し

て実施したものだった。また奥州市では同市文化振興財団が奥州市文化会館開館20周年記念事業として《椿姫》を上演している。

宮城県では、仙台オペラ協会が《愛の妙薬》と《ドン・ジョヴァンニ》を各2回上演しており、福島県では福島オペラ協会が《蝶々夫人》を上演している。さらに地域振興芸術委員会が「福島—Fukushima—復興・復活オペラプロジェクト」として新作オペラ《白虎》を7月に世界初演している。

このように、震災2年目の動向として、岩手・宮城・福島の3県で地元オペラ団体や上演団体が復興への希望をこめて積極的にオペラ上演に取り組んでいることはきわめて重要な動きといえるだろう。

海外オペラ団体の公演は、本年鑑2011年版で詳しくふれたように、震災と原発事故による影響で来日中止やキャスト変更等が数多くみられたが、2012年にはそうした影響は徐々に減じているように思われる。だがこの3県についてみると、2004年には5つの海外オペラ団体が4作品を7回上演していたのとは比べると、2012年はブルガリアのソフィア国立歌劇場が日本ツアーの一環として盛岡市で《カヴァレリア・ルスティカーナ》と《ジャンニ・スキッキ》を上演しただけだった。

3県以外に本拠を置く国内オペラ団体では、オペラシアターこんにゃく座が5演目を15回上演しているほか、オペレッタ劇団ともしびが《金剛山のトラたいじ》を3回上演しており、さらに千葉大学合唱団が林光の合唱オペラ《アシタノキョウカー—泉鏡花に歌う—》を特別公演として仙台で上演している。

このほか、オペラの舞台としてではなく音楽劇公演や合唱公演として、《カルメン》や《魔笛》が文化庁の「次代を担う子どもの文化芸術体験事業」の巡回公演として行われるなどの取り組みも行われている。

こうしてみると、被災2年目の状況は、岩

手・宮城・福島の地元オペラ団体や上演団体による活動が活発で、その上演回数は比較対象とした年のなかで被災2年目の2012年が一番多かったことがわかる。

3. 被災地でのオペラ上演—その反応と感想

震災後、国内外からさまざまな被災地支援の活動が行われ、それらは現在も続いている。音楽界では募金活動だけでなく、被災地や仮設住宅でのコンサート、さらには楽器の贈呈や被災した中高生たちへの楽器指導や合同演奏などが行われている。こうした支援活動を助成するさまざまな財団からの財政支援もあって、音楽による被災地支援は多彩に取り組まれている。しかしその多くは、独唱や重唱、合唱、弦楽・管楽アンサンブルなどであり、オペラそのものを上演する取り組みは、通常の巡回公演を行っているオペラ団体以外ではいまだ実現していない。

その理由として、演奏者や上演スタッフが多数必要でオペラ上演に巨額の費用がかかることが考えられるが、それだけではないように思われる。ひとつには「こういうときにオペラをやって良いのか」といった感情が上演する側にあることと、オペラの内容や歌詞が“死”とか“別離”を想起させ、被災した人々の感情にそぐわないのではないかという危惧である。

被災地の仮設住宅で支援コンサートを開いたある声楽家は、どんな衣装で歌うべきかなり思い悩んだと述懐していた。結果として、彼女はいつも通りの演奏会用ドレスで歌ったわけだが、コンサートに立ち会った筆者はその選択が正しかったように思われた。コンサートに参加した人びとは、歌もさることながら演奏会用ドレスと歌い手が創り出す華やかな雰囲気魅了されていた。そして終演後、多くの聴衆から「夢のようなひとときでした」といった感想が寄せられていたのが

強く印象に残っている。

「こういうときにオペラをやって良いのか」という感情は、この「夢のようなひとときでした」という感想と大きな隔たりがあるように思われる。むしろ「こういうときだからこそオペラを」という視点がいま必要だと思われる。

音楽による支援活動としてオペラを上演する活動ははまだ本格化してはいないが、いっぽうで定期的にこの地域でオペラ巡回公演を行っている団体の活動をみると、震災前と震災後では演ずる側はもちろん、観客の反応に変化があることがうかがえる。これはこの3県で恒常的にオペラ巡回公演を行っているオペラシアターこんにゃく座のメンバーへの聞き取り調査¹で強く感じた点だった。

オペラシアターこんにゃく座は主として学校での芸術鑑賞行事の一環として、岩手・宮城・福島²の3県で以前から定期的にオペラを上演しているが、2001年以降では、2007年と2009年の岩手県²、そして震災のあった2011年の福島県を除き、毎年この3県でオペラ上演を行っている。

聞き取り調査で、演ずる側の意識として震災前と後でどのような変化があったのかを尋ねたところ、座員たちは異口同音に演目の選定と内容にかなり気を使ったと答えた。例えばオペラ《ネズミの涙》(鄭義信台本・萩京子作曲)では、物語の展開のなかで主人公のひとりが死ぬが、こうした場面がどのように受けとめられるのかについて、かなり気を使ったという。またオペラ《ピノッキオ》(カルロ・コッローディ原作／山元清多台本・萩京子作曲)では、ピノッキオが海で大波に翻弄され鯨に飲み込まれる場面があるが、それが津波を連想させるのではないかと危惧したという。

震災前はこうしたことは全く考えなかったが、震災後はどうしても台詞や物語の内容が

観客に与える影響というものを考えざるを得なかったという。結果として、台詞や内容を変更することなく上演したが、「歌のステージ」では、曲目を一部変更したケースもあったという。

いっぽう観客の変化という点では、生徒が感情を抑えている様子を感じられたとか、表面的には非常に明るくしているが、以前とは違って表情や反応に硬さを感じられたという。こうした状況のなか、上演を重ねるなかで座員たちはオペラをいつもの通り上演することに徹したという。それは、オペラの舞台を通して日常とは別の世界へ入ることが、観客にとって大きな喜びであることを強く感じるようになったからだと言っていた。

震災の年に岩手県立高田高等学校で予定されていたオペラシアターこんにゃく座による芸術鑑賞会は、校舎が津波によって激しく損壊し、生徒14名が死亡、生徒4名と教職員1名が行方不明となる大惨事となったため、1年後の2012年6月26日に延期して実施された。その間、同座は義援金を集めたり書籍・楽器等を寄贈するなど、同校を支援する活動

を行った。

こうして迎えた2年ぶりの芸術鑑賞会について、同校2年生のある男子生徒は「本当ならば、昨年見ることが出来たのに、震災の影響で見ることができなくなってしまいました。あの日から自分たちの笑顔もすっかり消え失せてしまいましたが、時が経つにつれて、だんだんと元の笑顔に戻ってきました」と書いていた。また2年生のある女子生徒は、上演されたオペラ《ネズミの涙》を観た感想を次のように書いていた³。

主人公がネズミで、ネズミの世界を描いた劇だったのでとてもおもしろかった。普段は見ることのできないネズミの世界は、小さくて儚いものでありながら、希望を持って強く生きていこうというネズミたちの一生懸命さであふれた世界だった。戦争が続く中、それでも生き抜いていくネズミたちの姿からは勇気をもらった。大切な家族を失って深く悲しんだときもあったけれど、前を向いて進んでいこうという気持ちを持ち続けていて、人間にもそういう強さが必要だと思った。震災があってから1年以上経った今でも悲しみは消えていないけれど、希望を持ち続けて強く生きていきたいと思った。

こうした感想文を読むと、座員たちが当初危惧していた以上に、観客である高校生たちはオペラそのものから、生きる勇気と希望を

たくましく感じ取っていることがうかがえる。このことは、仮設住宅でのコンサートを聴いた高齢者が「夢のようなひとときでした」と感想を述べていたことと共通するものがあるように思われる。

4. まとめにかえて

被災した岩手・宮城・福島の3県を音楽で支援しようという動きは大きな広がりを見せており、現在も多彩に取り組まれている。地元紙の「河北新報」は、2011年12月27日付夕刊に「2011 仙台圏 芸術この1年／心の復興を模索、連帯」という回顧記事を掲載したが、それによると「被災地のオーケストラとして存在感を見せたのが、仙台フィルハーモニー管弦楽団。市民有志らと『音楽の力による復興センター』を発足させ、仙台市内外の演奏家とボランティアで行う『復興コンサート』を始めた。(中略)復興コンサートは、避難所や学校などで続けられ、11月上旬には200回に達した。」と伝えたあと、仙台オペラ協会がオペラ《鳴砂》を新国立劇場で上演したことについてふれている。

ではオペラについて「河北新報」の紙面ではどのように報じられていたのだろうか。同紙の記事データベースで“オペラ”をキーワードにして検索すると、2011年3月12日から2013年8月31日までの約2年半の期間でヒットした記事は391件あるが、その内容がオペラ上演やオペラ歌手および団体についてふれているものは27件である。これは検索の際になんらかのかたちで“オペラ”という単語が含まれていればヒットするわけだから、少なくなるのは当然である。

この27件のうち、地元の仙台オペラ協会に関するものが10件で、他の17件は内外のオペラ歌手が復興支援のコンサートを開いたことや、フィリピンを舞台にした茂山あきら演出によるオペラ《カルメン》の上演告知

(2013年2月14日)、あるいは白石高校合唱部がオペラ《口はロボットの口》(鄭義信作・演出、萩京子作曲)の上演に取り組んでいること(2012年5月25日)、さらには会津若松で初演されたオペラ《白虎》が第11回佐川吉男音楽賞を受賞したこと(2013年8月8日)などである。

つまり前節でもふれたように、地元オペラ団体や通常の巡回公演を行っているオペラ団体などの活動を別とすると、復興支援として被災地でオペラを上演する動きは、必ずしも活発とはいえないことが地元紙の報道をみてもわかる。

そのいっぽう、第2節でみたように地元オペラ団体の活動が活発におこなわれており、その活動に二期会や藤原歌劇団等で活動する歌手やスタッフが参加・協力するかたちが見られる。2012年8月に岩手県奥州市で上演された《椿姫》は、同市出身のテノール福井敬(二期会)、指揮者に星出豊(昭和音楽大学名誉教授)、演出に三浦安浩(新国立劇場オペラ研修所講師)、総合プロデューサーに同市出身の及川貢(藤原歌劇団名誉合唱指揮

者)などが参加し、市民参加の合唱団や管弦楽団とともに舞台を創りあげていた。

こうした参加・協力によるオペラ上演は、オペラによる復興支援を大きく広げていく可能性を持っていると思う。また、巡回オペラ公演を行っている団体による被災地でのオペラ上演がいっそう大きな役割を担っていることは、前節でみた高校生の感想文を読むと深く納得できるだろう。

つまり、オペラによる復興支援とは、一過性のイベントとしてオペラを上演することではなく、オペラを日常に根ざしたものとして楽しむことができる状況を創りだす取り組みだと思うのである。震災2年目の状況は、そのことを問いかけているように思われる。

¹ 聞き取り調査は2013年7月19日に同座稽古場で座談会形式により実施。参加メンバーは5人の歌役者たち。

² 2007年の岩手県では他団体を含めてオペラ上演そのものがゼロだった。

³ 生徒の感想文は岩手県立高田高等学校図書館発行『浜茄子』第52号(2013年3月発行)より引用。